「クリスマスに平和の祈りを」

ルカによる福音書１９章２８－４４節

森島　牧人　牧師

本来、「平和の構築」は、政治的な判断はさまざまにあるとしても、心を合わせて真剣に考えなければならないはずのものです。しかしニュースを見ていると、平和は一体どこにあるのかと思わせられますし、教育現場に身を置いた者としては、今の我が国のその分野は見逃す訳には行かない状況にあるとの思いがします。今日はアドベントを迎えたことの意味を聖書の御言葉に聞きながら、「平和」をテーマに考えて行きたいと思います。

アドベントとは＜到来＞という意味で、一般的には主イエスの誕生を憶え、それを喜び祝うクリスマスという行事に備える期間となっています。このクリスマスという祭りが始まったのは二世紀から四世紀頃とされていますが、記録がなくはっきりとはしていません。主イエスの誕生から二千年経った今でも、世界中でその日を記念し祝うというのは喜ばしいことではありますが、現在の私たちがアドベントの期間中、過去の主イエスの誕生の日を待って過ごすというのは、おかしいと思います。私たちが主の誕生を憶えつつも待っているものとは、それは将来の・未来の出来事、すなわち主イエス・キリストの再臨です。「復活され、天に昇り、全能の父なる神の右に座しておられ、そこから来られて生きている者と死んでいる者を審かれる」主イエス・キリストの到来をこそ、私たちは待ち望んでいるのです。第一の到来であるクリスマスの準備を通して、第二の到来である再臨に備え、それを待ち望み、信仰を深めて行く、それが今の私たちのアドベントの正しい過ごし方です。将来、私たちのところへ到来される主イエス・キリストをどのようにお迎えするかを、今日の聖書から学びたいと思います。

ここには主イエスが子供の頃には何度も上られたであろうエルサレムへ、公生涯としては初めて、しかも最後の入城を果たされた時の出来事が書かれています。それは受難週の一日目の日曜日のことで、ご自身の言葉通りに調達された子ろばに乗って、主イエスはエルサレムへ入られたのでした。それはゼカリヤの預言「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなくろばに乗って来る　雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ。」（ゼカリヤ 9：9・10）の実現でした。エルサレムの平和は軍馬ではなく、へりくだったみすぼらしいろばに乗って来られる、真の王・主イエス・キリストによって実現されるとの預言だったのです。

預言の通り、人々は「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光。」（ルカ 19：38）と歓呼の声を上げて主を迎えますが、その後すぐに平和の王としての主を拒絶することになります。聖書には「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。『もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら・・・。しかし今は、それがお前には見えない。やがて時が来て、敵が周りに堡塁を築き、・・・お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。』」との主の言葉が記されています。主は、すべてを知った上でエルサレムに入城されたのです。そしてこの時主が言われた通り、平和の道をわきまえなかったエルサレムは、紀元七十年にローマ軍によって陥落、潰滅的に破壊されたのでした。

この出来事は、しかし、当時のエルサレムやユダヤ民族だけの話ではありません。果たして、私たちの国は平和への道をわきまえていると言えるでしょうか。教育基本法に「愛国心を養う」との文言が加筆され、国際平和のための活動を名目としての自衛隊の強化が目指される中で、憲法改正が声高に言われています。

二千年前に来られた主イエス・キリストが最後にもう一度「平和の王」として地上に来られる・・・私たちが平和への道を進むためにはそのことをわきまえ、再臨の主をお迎えする備えが出来ていなければなりません。アドベントの間に私たちがなすべきことは何であるのか、クリスマスの日まで考えて行きたいと思います。

（説教要約　羽入田悦子）